

文体素としての分離前置詞*

志 賀 謙**

I. 序に代えて

語学教育にたずさわる我々がいつも不安に感じることは、我々が外国作品の表現スタイルに対して全く盲目ではないかという問題である。自国の文学作品に対しても、普通印象的にしかそのスタイルをとらえ、語るができない我々が、発想形式も表現形式も異なる外国語の表現スタイルを果してどの程度までとらえることができるかという不安である。

スタイル、特に文体の場合には、未だその定説は生まれていない。従来の印象的文体論に対して、作品に現われた表現上の個性をとりだして、それらを綿密にしらべあげる分析、統計的な方法が近来よく行なわれるようになって来たが、これとても果して作品の文体論であるのか、それとも作家の文体論であるのか、或いはまた単なる技法の研究に過ぎないのか、いずれにしても、文体の本質にふれるものではないようである。

スタイル（様式）の概念と密接な関係があるものに形式がある。文章の場合においても、「文章形態と文体とをはっきり区別しなければならない」が、同時に「文体が客観的形式と個性的様式の葛藤的融合から生まれたものであり、そこには、シュールのいう「言と言語」の関係にも似たものが見られる」ということもうなづかれる。そして更に、スタイルとは、創作という過程において、たえず形式との相剋の中にそれを克服従属させようとする創造性の代名であり、「文章形式の限定が精密になるにしたがって、様式にせまることが可能」とする論に対して、そのような「さまざまな文章形態の分類系図をつくってみた所で、どうにもなるものではなく、『表現—形式=スタイル』と算術的に行かない所にスタイルの問題の困難さがある」という説もうなづける。だがこれらの説明に対しては、中心からはずれることはないにしても、なにかもう一步の追求が足りないような感じをいだかざるを得ないのである。

形式の追求が様式への接近を可能にすることは一応うなづかれるが、それ自体が様式そのものの解決にはなるまい。しかし、この辺にも大きな問題が残っている。果して、現在までこの形式面の追求が充分なされて来たかという問題である。伝統的な修辞学や文法学がどうしてもふれ得なかった領域で、しかも論理学や分析哲学の助けを求めねばならない表現形式

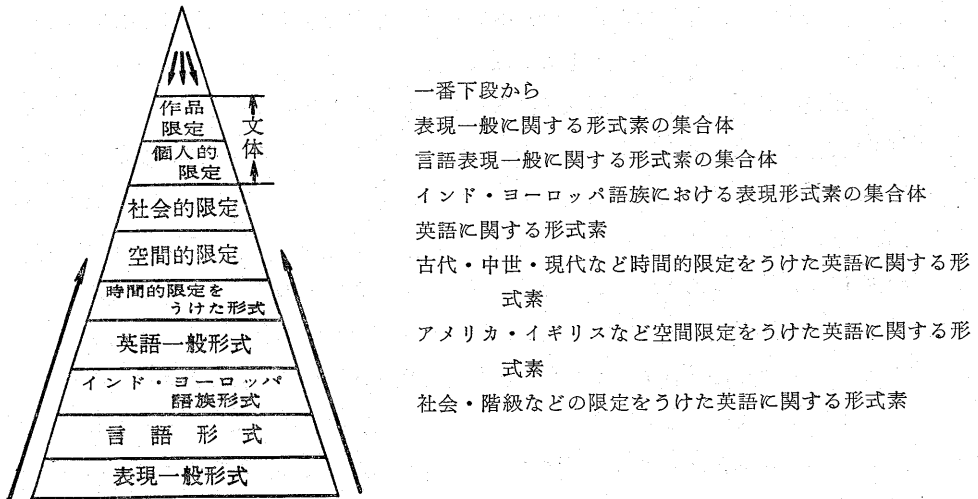
* A Study of Detached Preposition as a Stylisticum

** Ken Shiga

や、動機伝達の面から見た表現形式の研究など、いまだ十分手のつけられない領域はかなり残っているのが現状であろう。それらの表現形式に関する総合的な研究成果が得られてはじめて、「表現＝形式＝スタイル」の等式が可能かどうかという問題が提示されなければならない。まして、「創造者とは、いつの時代も、新しい形式の獲得者」であって、新しい形式が古き様式即ち形式を糧とした、生成活動の結果得られた様式であるならば尚更、様式論に先だつものとして、十分な形式研究が必要であろう。

たしかに形式面での追求は、そのまま様式論につながるものではない。しかし、統辞素から文体素へと飛躍させるところにも、そしてまた、客観的形式と個人的様式という、現在までの所、いずれも会体の知れぬ者の融和体を文体と見た所にも問題が感じられる。問題は統辞素と次元を異にする形式素というものが、如何なる過程によって文体素に昇華し得るのかということであり、客観的形式を個人的様式が克服する媒体が一体なんであるかということである。

形式は、それが客観的なものとして蓄積され得る世界として、いくつかの三角形的層をみとめることができる。そして、それぞれ異層に蓄積されている形式素は、個人的形式にむかう抽象的段階として位置づけられる。仮にこれを英語表現に関係させて図示すれば次のようになる。



以上のような異層をなす形式素を有機的に統合したものとして、その上に所謂スタイル（文体）がある。しかしこれらの形式素をスタイルにまで統合するもの、即ち形式素に文体素としてのエバリュエーションを与えるもの、更にいうならば、それらの形式素に生命をあたえて文体素に昇華させ得るもの、それは他ならぬ作家自体の point of view であり、人生に対する姿勢に他ならない。それは同時に作品をテーマの上に密着させるものでもある。種々層を異にして深く客観的存在として眠っている形式素が一つの意味世界の中で、生命を与えられ、息づいてはじめて、様式・スタイルが生まれるということができよう。しかし、一度定

着されたスタイルは、すぐに形式素への転化を起しはじめる。すなわち、文体は作品の中にあってはじめて文体となり得るのであって、作品から抽出された文体素は、新しい形式素として、客観的な形式の総合体の中に入って行く。ここでスタイル論は、当然、文学史そして批評の領域まで広がってくる。

以上述べたように、文体論に欠くことのできないものとして、総合的、かつ綿密な形式研究と、そしてそれらを個々の作品の中で、スタイルとして息づかせている作家の資質に対するパースペクティブのきく批評的精神をあげることができる。

この小論では、形式面の追求の一つとして、分離前置詞という英語領域に於ける形式素をとり出し、それに若干の考察を試みてみたい。

(本学研究紀要7集 原子朗「スタイル論の方法」参照)

II. 分離前置詞 (Detached Preposition)

Preposition は原則として後置の Noun equivalents と共に Adjective phrase 或いは Adverb phrase などを構成する Function word である。それは文中において Noun equivalents と Noun, Adjective, Verb などの他の品詞との関係を表示する Function word ともいえる。しかし上述のように Preposition は後に Noun equivalents を従え、その位置によって他の品詞と関係づけられるべき Noun equivalents を表示する。

The house on the hill is mine. / My house is on the hill.

即ち、Preposition “on” は二つの概念 the house と the hill、或いは is と the hill を二つの関係極として提示すると共に、それらを意味的にも関係づけている。

しかしこの Preposition のもつ二つの性質が、英語のいろいろな言語活動において、そこなわれる場合がある。二つの概念の関係提示という性質の消失は、Adverbial accusative (eg. I have walked three miles) や Accusative of Description (eg. The book is no use) などにおいて Preposition の脱落という形に見られる。またこれに対して、後置の関係極の明示という性質が消失する場合がある。これが小論の主題である分離前置詞 (Detached Preposition) といわれるものである。この場合、Preposition は前置の関係極のみを提示し、後置の関係極は鎖をきられて文中に分離するか、もしくは文外にはじき出される。文外にはじき出された場合には Adverb への転化と考えられるが、本論では、後置の関係極が、文中に分離した現象を特に考えて見たい。

Preposition は後置の関係極と共に Prepositional phrase を構成し、その Phrase 自体が Adjective equivalents 或いは Adverb equivalents となるものであるから、その Phrase 内の密着性は非常に強度なものといわなければならない。分離前置詞が現われるのは、そのような Function word としての密着性を上まわって、それを破壊する力が外から加えられた場合である。その外力としては、大きく分けて、統辞的な力と、形式的な力の二つが考えられる。

III. 統辞素としての分離前置詞

英語においては、Sentence construction を アブノーマル なものにすることによって、文構成を限定し、意味を特殊化する場合がある。総じて Inversion (語順倒置) と呼ばれるものである。疑問・感嘆・受動態のような文構成がこれにあたる。このような文法上の拘束としての Inversion が、統辞力として Prepositional phrase に影響を与える場合、Function word として Preposition の統合力が破壊され、分離前置詞が生ずる。したがって、この種の分離前置詞は統辞素として規定できる。

a) Question (疑問)

They are looking for the book.

What are they looking for?

cf. For what are they looking?

疑問文の場合には、統辞力としての Inversion も、徹底的に Prepositional phrase 内の統辞力を破壊する程のものではない。つまり For what ...? という文構成が可能である。しかしこの場合、文が前置詞ではじまるという論理曖昧性と、ぎこちなさをすくうため、Preposition "for" が自らの統辞力を犠牲にして、疑問という大きな統辞力の安全弁としての機能を果している点多分に形式素的な性格も見られる。この安全弁としての Preposition の機能は次のような Adverbial accusative の場合、更に強く示されている。

He got up at five.

What time did he get up?

cf. When did he get up?

なお、これと関連して Vulgar Usage ではあるが次のような分離前置詞もある。

Where are you staying at?

上述のような Direct question にかぎらず、Indirect question の場合にも、分離前置詞は統辞的な所産として現われることは論をまたない。

b) Exclamation (感嘆)

感嘆文も Inversion による文構成の 1 つであり、ここにも分離前置詞の現象が見られるがこれも疑問文におけるものと同様の性質のものである。

What a large house he lives in!

しかし、疑問文とは異なり、統辞的な性質が強く、この種の文では分離しない形はないようである。

c) Passive (受動構文)

Passive も一種の Inversion による文構成であり、同様に分離前置詞の現象が多く見られる。しかし、この場合は Inversion だけが統辞力として作用しているわけではなく、もう一つ別の統辞力が、その発生の条件として働いているのは見逃せない。それは Verb-preposition Combination ともいわれる統辞力で、この場合 Preposition は後置の関係極に対する志向性よりも、前置の関係極 (主に Verb) への志向性が強まり、Verb phrase 構成のための Func-

tion word という機能を果している。すなわちそれは、Voice Marker あるいは他動詞表示語としての働きである。この志向性の変化は能動構文においては、表面に出ず、受動構文転化への潜在力としか存在しない。

The postponement of a preposition to the end of a question or a subordinate relative clause is not easily disposed of.

この種の分離前置詞はただ受動構文のみに限られるわけではなく、当然受動準動詞構文 (Passive verbal construction) にも見られるものであるが、この点に関しては後にふれることにする。

IV. 統辞素・形式素の両面をもった分離前置詞

Preposition の後置の関係極が Relative pronoun の場合、Relative が Relative clause を導くという英語の統辞的拘束から、そこに Inversion が働き分離前置詞が現われる。

He studied the long, complicated bills that he was supposed to vote on.

I began to realize that most of the things I had been striving for before weren't worth while at all.

cf. The mind had to be made conscious of the physical reality from which it was accustomed to shrink.

上例のように Relative clause において Preposition が分離する場合と分離しない場合の二つの現象が並存していることは、統辞力としての Inversion の他に、何か形式的な力が働いていることを示している。

この形式的な力の中で特に考えられるものは Emphasis である。英語にあっては、文頭と文尾の語に最も Emphasis が与えられており、その中でも特に文尾のそれは大きい。

In the average English sentence, one of the positions of greatest emphasis is the ending. The reasons for this are not quite clear: perhaps the ending remains especially clear in the reader's mind because he has heard it more recently than the rest of the sentence. Or it may be that the usual intonation of English speech affects the 'inner voice' of the reader, gives a kind of climax at the end of the sentence... (Hugh Sykes Davies *Grammar*) Tears この場合 Preposition は Prepositional phrase 内の統辞力を自ら犠牲にし、文尾に位置することによって Emphasis を誘引する。

さらに、分離前置詞が現われるのは、Verb にかかる Adverb phrase の場合が多く、結果的に分離前置詞が終る意味世界 (句・節・文など) は、一種の動詞どめの表現であり、この点 Emphasis の効果を強める一方、それに続く意味世界への踏台としての機能や、効果的な Periodic Sentence (掉尾文) 構成のための役割がこの種の分離前置詞に見られる。以上のような積極的な形式力にもとづく分離前置詞の他に Parallelism (対句法) などの消極的な形式力の所産として現われる分離前置詞もある。

したがって Relative clause では Relative 本来のもつ統辞力としての Inversion と、以上述べたような Emphasis その他の形式力の相互関係によって、Preposition の位置がきまるといことができる。

また Relative adverb は意味上 Relative pronoun+Preposition の構成を持つものとされているので、これによる Relative clause には分離前置詞は普通生じない。しかし、ここでも where と at, by, in, of, on 等の Preposition が慣用的に結合した Compound relative adverb があり、特異な形の分離前置詞を見せている。

the box whereon it lay (=the box on which it lay)

the man whereof he spoke (=the man of whom he spoke)

V. 形式素としての分離前置詞

Inversion のような統辞力のために生じる分離前置詞とは異なり、主に形式的な力、或いは、スタイリッシュな力によって分離前置詞が押し出される場合には、次のようなものがある。

a) 受動準動詞構文 (Passive verbal construction)

これには Inversion にもとづく Passive という統辞力が勿論作用しているのであるが、それ自体が、準動詞構文という大きな形式力の中に生みだされたものであるという点で、この場合は形式素としての分離前置詞と考えることができる。

Gerund.

He took a chair without being desired, and talked for sometime without being attended to.

なお上例には Parallelistic な形式力が作用していることも見逃せない。

Gerund は、動詞の抽象化による動作名詞である。したがってそこには、かなりの動詞性が残されているが、ある場合には、高度の抽象によって、基本的な動詞性 (Tense, Voice, Subject など) まだ捨てられることがある。Gerund に見られる Acto-passive voice もその 1 つである。すなわち、ある種の動詞 (bear, need, stand, take, want, etc) に続く Gerund は Active でも意味上、Passive になる。したがって、Acto-passive gerund においても、分離前置詞が見られる。

I won't bear thinking of.

The cottage would need looking after.

He agreed that the words 'wholly and mainly' needed looking into.

Past participle.

We are in the position of a doctor called upon to prescribe for a patient.

Each self will possess the privilege insisted on by the same poet.

This brings us to the highly contentious question already referred to in the introduction.

しかしこの場合は、Passive sentence におけると同じように、Preposition が前置の Verb に索引されて、一種の Verb phrase を構成するものだけにしか見られない。出来上がった Verb phrase の強さは次の例でよく示されている。

A deep fund of longing and regret expresses itself in a day-dream which recreates the visual concreteness of the longed-for objects.

b) その他の準動詞構文

Infinitive (1) (Adjective use)

前置の Noun とパタンする Infinitive, すなわち Adjective use の Infinitive construction には、分離前置詞がよく現われる。

a. His desire to help others was earnest.

b. Have you many friends to help you?

Noun cluser に用いられる Infinitive には二通りあって、上例のように、Content clause 代用のものと、b のような Relative clause 代用の 2 つがある。分離前置詞が生ずるのは b の Relative clause 代用の Infinitive construction である。

There was nothing to look at and no one to speak with.

He must be left alone with sufficient material to work with.

I had several shapes to appear in.

They had each a bed to sleep in.

この種の Infinitive も、その Acto-passive の性質から分離前置詞が生まれるとの意見もあるがこれらの分離前置詞と、その前にある Verb の結合には、Transitive verb に相当するような統辞力が見られない点を考えると、単なる Relative clause 代用と見るべきであろう。すなわち、この種の分離前置詞には Voice-marker としての機能はなく、単に Relative clause のもつ awkward な構成をさけて、論理速度やその明快性簡潔性を得るという形式的な力によって生じたものである。

Relative clause とこの Infinitive construction の中間の表現に、分離前置詞が生じる可能性があるが、実際には、前置詞は殆んど分離を見せていない。

All of us have many things for which to be thankful.

We must have a language in which to discuss the affairs of mankind.

She must have a man to whom to cling.

He brought with him a few fresh anecdotes with which to entertain his dinner party.

Lacking thoughts with which to distracy himself, he must aquire things to take their place.

すなわち、この種の表現には、前置詞を分離させる程の形式力が作用し得ないといえる。ただし、Interrogatives で導かれるこの種の Infinitive construction においては、分離前置詞が見られる。この場合は統辞力による分離前置詞である。

Brisk digests of what to look out for are offered to the motoring public.

The difficulty is to know which one to give bail to.

以上の考察は Relative pronoun による Relative clause を Infinitive construction で代用した場合であるが、次に Relative adverb によるものについて、しばらく考えて見たい。

Relative adverb による Clause が Infinitive construction で代用される場合は、Antecedent が省略されて Relative adverb+Infinitive という構成（この場合 Interrogative adverb とも見なされる。eg. Tell me where to sleep.）になるか、もしくは、Relative adverb が省略されて Antecedent+Infinitive という構成（即ち Adjective use の Infinitive eg. I have no time to study）を見せるのであるが、Relative adverb 自体が “Preposition+Relative pronoun” の性質をもっているため、概して分離前置詞は見当たらない。

I have only had time to cultivate a tiny corner of the inheritance.

This man probably had about fourteen or fifteen years to live.

The place to begin the process of individuation is in the delivery room.

They are in a position to do more than foam, they are in a position to open our letters.

One sure way to forgive and forget our enemies is to become absorbed in some cause.

I saw no reason to admit it.

More than all other men have authors reason to appreciate the indirect utilities of knowledge.

以上の類例は、Relative adverb による Relative clause に代るものとして用いられた Infinitive construction のため、分離前置詞は見えない。しかし、この種の例でも分離前置詞が現われる場合がある。

She hadn't had the time to be ill in.

The house has ceased to be the best place to go to.

これらは Relative adverb ではなくて、Relative pronoun が潜在的に働いていると思われる。すなわちこの前の段階として、次のような類例があげられる。

The Senate and Convocation were to be allowed a reasonable time in which to implement this policy.

Portsaid was always a good place in which to get stung.

以上のように、“0”分離前置詞を要する統辞力が働いている場合にも、分離前置詞が現われるということは、そこに何らかの形式力が作用しているから見なくてはならない。Emphasis, Parallelism, そしてまた、文尾に前置詞を用いることによって、その意味世界のもつ緊張を瞬間的にたかめ、同時に次の意味世界への踏台を兼ねるといった Stylistic な力などが作用

する場合であろう。

またちょうどこの現象とは逆に、統辞力が分離前置詞を要求する場合でも、論理速度や論理明快性などの形式力があたかも、“O”分離前置詞を要求し、それが定着してしまったような現象もある。

He had no money to buy food and fuel.

He had no money to buy food and fuel with.

すなわち上例では、統辞力としては分離前置詞 with を要求しているが、実際にはそれが脱落した形が用いられている。次例もその例である。

with a license to practice his profession

the man with educated faculties to achieve culture

without much power to move them

cf. The artist has a more perfect instrument on which to play.

この種の Infinitive は、以上のような Relative clause 代用の Infinitive, Content clause 代用の Infinitive, 更に目的など示す Adverb use の Infinitive の混淆の結果生じたものと思われる。

Infinitive (2) (Adverb use)

普通 Adverb use の infinitive と呼ばれるものが分離前置詞をとる場合がある。

London has become hardly fit to live in.

The books of the College library are delightful, indeed, to look at.

The moon was certainly, of the two, more cheerful to live with.

It wasn't really very comfortable to live in.

この種の分離前置詞は、指定の不定詞 (Infinitive of Specification) に現われ、pitiful, difficult, easy などの Adjective に Specification をあたえる場合に生じる。そして Preposition から分離した後置関係極は、Infinitive の直前というよりも、Passive や Interrogative に見られるように、極度に離れた存在となる。この点、分離前置詞は Adverb 的性格が強いといえる。しかも指定の不定詞をとる Adjective の中で、分離前置詞と関係する pitiful, difficult, easy, hard, pleasant, comfortable, delightful, cheerful, nice, convenient などの Adjective は “It is+Adjective+Infinitive” の構文に交換できるものである。

It is delightful, indeed, to look at the books of the college library.

It was certainly more cheerful to live with the moon.

この種の分離前置詞は統辞力というよりも、ある種の形式力によって生じたものといえる。

a. It is easy to read this book.

b. To read this book is easy.

c. This book is easy to read.

- a. It was cheerful to live with the moon.
- b. To live with the moon was cheerful.
- c. The moon was cheerful to live with.

上例で、a, b, c のそれぞれの表現量ともいうべきものには変りはない。しかし a, b においては、表現核ともいうべきものが to read this book, to live with the moon という Phrase であるに対し、c の表現核は this look, the moon という Noun である。このようにある一つの意味単位を持っている語群の中の総合的な表現量を変えないで、核の転位という質的变化を要求する形式が加えられた場合、かなりの統辞力で結合されている Prepositional phrase が、語群の統辞性をすくうため、安全弁となって分解する。この結果分離前置詞が現われるのである。この種の表現核の転位は先に述べた Relative clause. そして Relative clause 代用の Infinitive construction にも見られる。

また Adverb の too, enough は、それらが関係する Adjective を、この種の特異な、‘指定の不定詞’に結びつける性質を持っているため too, enough によって導かれる Infinitive にも分離前置詞が見られる。

He was old enough to have been ready, yet too young to have been called upon.

The river is too deep to wade across.

The brown paper is too thick to light the face with.

Gerund

表現核の転位による分離前置詞は、Gerund にも見られる。

- { It is easy reading this book.
- { Reading this book is easy.
- This book is easy for reading.
- { It is dangerous bathing in this river.
- { Bathing in this river is dangerous.
- This river is dangerous for bathing (in).

しかしこの場合は、分離前置詞が脱落することが多い。これは、Gerund の抽象程度が高く、動詞性が除去され、動作名詞としての名詞性が強くなるという統辞性によるものである。

上例の for は、指定の Noun equivalent を表示する機能を持っているが、同様な表示語として、Gerund とバタンする Adjective に worth がある。ここにも分離前置詞が見られる。

They are not even good places for working (in).

There is something worth living for.

We need to have our liberties taken away from us in order to discover that they are worth dying for.

That is the only happiness worth seeking for.

In any civilization worth living in,...

総じて以上のような準動詞構文の統辞性の中にみとめられる形式力は、リズム感から来る要求の他に、簡潔性・明快性・速度感などがあり、更に積極的なものとして、表現核の転位、Parallelism, Periodic sentence など文章構成上の諸力があげられる。このような大きな形式力のために、押し出された分離前置詞は、それ自身が、意味世界を圧縮し、緊張度をたかめることによって、次の意味世界の跳躍台となるという形式力を持っている。

c) その他特殊の文章構成において

a. “It ~ that” の Emphatic construction において

- a) He struck the desk with my book.
- b) It was with my book that he struck the desk.
- c) It was my book that he struck the desk with.

これも Emphatic construction の中で起きる、一種の表現核の転位から生じる分離前置詞であるが、機能語としての Preposition の性格がよくあらわれている。

It was only the Valse Triste bit we agreed on.

It's not Mr. Savage I mind about; it's my boy.

Ever since the first day I wished it was any other day I had the watching of.

b. Comparative Construction において

比較の Adverb clause においても、特殊な場合に、顕著な Inversion によって Emphasis をつくりだすことがある。この場合にも分離前置詞が現われる可能性がある。その例は余り多くない。

The larger house he lives in, the more money he is dependent on.

上例には Emphasis の他に、Parallelism が形式力として作用している。

c. Concessive Construction において

譲歩の Adverb clause においても、Question や、Relative clause に準じた Inversion が作用するため、ここにも分離前置詞の例が見られる。

But whoever the church belongs to, Governments have always striven to walk hand in hand with Bishops and cathedral chapters.

In the city “open air” means any place where the view stretches for more than a few yards, whatever the view is of.

You've got to have a pretty solid background in theoretics, whatever you go in for.

以上の文章構成に見られる分離前置詞は一見、統辞的な力によって押し出されたものと見えるが、そこに Emphasis という形式的な力が作用していることは見逃せない。この場合の

Emphasis は, Preposition が, 後置関係極に対する統辞力を破ることによって, 外力即ち読者の注意を誘引し, そこに Emphasis を期待するものである。

Reference :

- The Structure of English (C. C. Fries)
- Modern Rhetoric (G. Brooks & R. P. Warren)
- English Prose Style (H. Read)
- Current English (Kennedy)
- Words on Paper (R. H. Copperd)
- Patterns of English (P. Roberts)
- The Development of Modern English (S. Robertson)
- Present-Day English Syntax (G. Schevrweghs)